

広島派遣報告



▲平和の集いに出演した令和5年度派遣中学生と我孫子中学校演劇部

令和5年12月3日(日)、けやきプラザふれあいホールにて「平和の集い～我孫子から平和を願う～」を開催しました。派遣中学生たちは、広島で学んだことや感じたことを、スライドを交えながら報告しました。

本書では派遣中学生による報告を一部抜粋してご紹介します。

.....
のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました

これは、あの日の、ある少女の手記につづられた一言です。原爆が投下された、あの日のできごとをつづっています。少女が必死に生きようとする姿を想像すると、「がんばれ」と思う一方で、「どうして、そんな思いをしなければならなかったんだ」と、悲しい、悔しい気持ちになります。

1945年、昭和20年8月6日、月曜日。

その日の朝は快晴で、真夏の太陽が昇ると気温はぐんぐん上昇しました。

深夜0時25分に出された空襲警報が午前2時10分に解除され、ようやくまどろみかけていた人々は、午前7時9分、警戒警報のサイレンで再びたたき起こされました。

この時はアメリカ軍機1機が広島上空の高いところを通過していただけだったため、警報は約20分後の午前7時31分には解除されました。

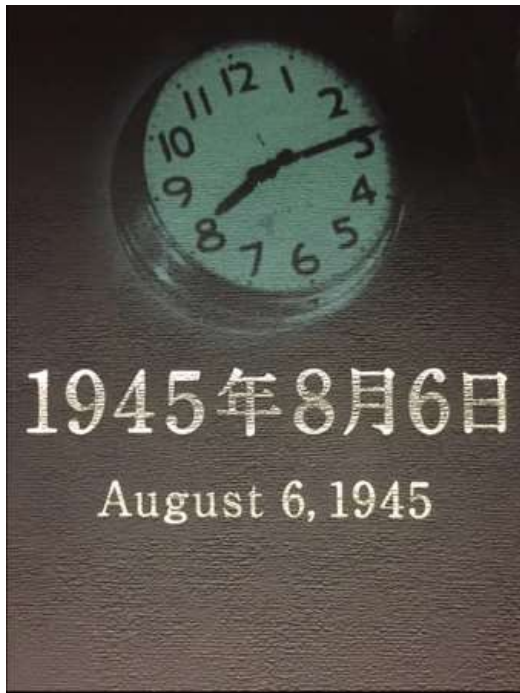
警報が解除された後、町の人々はいつものように一日を過ごし始めました。

戦時中とはいえ、仕事に行く人、学校に通う人の姿が広島街にはあふれていました。

いつもと変わらない日常が広島にはありました。

しかし、一瞬でその日常は失われることになりました。





午前8時15分、一発の原子爆弾が広島に投下されたのです。



原子爆弾は地上から約600mのところで爆発しました。

強烈な音と閃光、衝撃波、爆風を放ち、100万度を超える火球となり、莫大なエネルギーが放出されました。

爆発から1秒後には、半径200メートルを超える大きさとなり、爆心地周辺の地表面の温度は3,000~4,000度に達したと考えられています。

鉄が溶ける温度が約1,500度。私たちの想像の範囲でも理解しがたい熱さとなったのです。

そのたった一発の原子爆弾により、広島は街は一瞬にして焼け野原と化しました。



我孫子中学校・百海 恭吾さん

爆心地から1.2キロメートルの範囲では、その日のうちにほぼ50%の人が亡くなり、それよりも爆心地に近い地域では、80%以上の方が亡くなられたと推定されています。

広島での死者は、1945年末までに、累計約14万人となっています。

そして、あの日から78年の年月が過ぎました。



私たち12名の派遣団は、市内6校それぞれの中学校を代表し結成され、被爆地となった広島へ向かいました。

我孫子市平和事業

広島14回 長崎4回

派遣中学生178名



これまでに我孫子市では、広島に14回、長崎に4回、中学生を派遣してきました。

戦後60年の2005年、平成17年から始まった事業です。

合計178名の中学生が我孫子市平和事業の一環として、派遣されてきました。

事前説明会 事前勉強会等

私たちは今年の7月24日、我孫子市内6つの中学校から2人ずつ、代表として長崎への派遣説明会に参加しました。

広島派遣を3年続けて行い、今年は長崎への派遣が予定されていました。

令和5年度 中学生派遣事業 事前説明会・事前学習会等

日時 : 令和5年7月24日(月) 午後1時30分から4時30分

場所 : 我孫子市役所 議事堂2階 議場

【事前説明会】13時30分から14時15分

派遣者及び引率者顔合わせ、行程の説明、注意事項など

【事前学習会】14時15分から14時50分

先輩派遣中学生からのお話・質疑

- ・令和元年度派遣中学生 稲見 帆夏さん
- ・令和2年度派遣中学生 山元 誠人さん

我孫子市原爆被爆者の会の方からのお話・質疑

- ・我孫子市原爆被爆者の会 会長 的山 ケイ子さん

【市長・教育長との懇談】15時00分から15時50分

市長・教育長との懇談、写真撮影

【その他】15時50分から16時30分

団長・副団長の決定、活動グループ分け、部屋割り

説明会では、平和市民会議の桑原さんや、原爆被爆者の的山ケイ子さんから貴重なお話を伺い、原爆とはどのようなものなのか、また、自分たちがこれから派遣される目的などについて考えました。

実際に長崎で胎内被爆された的山さんの話を伺い、平和事業への取り組みの重要さに気がつきました。





そして、的山さんと一緒に長崎の地に向かうことに、大きな意味も感じていました。

以前、派遣事業に参加された先輩方の話では、自分の派遣の経験をもとにしたアドバイスや、どんなことに注目して派遣に行ってほしいか、また、どんなことを感じてきてほしいかなど、たくさんのことを教えていただきました。

先輩方から、行ってみてわかることがたくさんある、派遣から時間がたった今も活動していることの意味などを伺ったことで、「次は自分が派遣団の一員なんだ」と、少し自覚できました。



さらに、星野順一郎市長や、丸智彦教育長からお話を伺いました。

今回の派遣に、私たちがどんな思い、志を持って被爆地へ行くか、また実際に現地へ行く意味とは何か、現地に行かなければできない、わからないことはなにか。

それらのことを深く考えながら聞きました。

「なぜ被爆地派遣に参加しようと思ったのか、現地で何を感じてきたいか。」



という市長からの質問に対し、一人一人が深く考え、発言することで、派遣への意欲を高めました。「知識は後からでいい。現地で感じるのが大切だ」とおっしゃった市長の言葉に、自分でももう一度派遣に行く意味を考え直しました。



白山中学校・小菅 新太さん



私たち派遣団は、説明会を経て多くのことを知り、派遣までの間、長崎に投下された原子爆弾や当時の状況について調べ、出発の日を待ち望んで過ごしました。

最初は、この仲間と仲良くなれるのか、大丈夫かと不安ももちろんありましたが、派遣の日が近づくにつれ、早くその日が来ないかと待ち遠しくなりました。

しかし、九州を直撃する台風の影響により、平和祈念式典の参列が中止になり、現地での安全確保が困難となったことで、長崎への派遣が中止となりました。「これでは行けないよな…」と、中学生ながら感じていましたが、市役所の方々のご尽力により、急遽、広島に派遣先を変更していただき、8月10、11日の広島訪問が実現しました。日程が短くなってしまったことは残念でしたが、「広島に行けるんだ」と分かった瞬間から、これまで以上に派遣に行く意味を考えるようになったのです。

長崎市長の平和宣言より

- ・核兵器の使用は「杞憂」ではなく、
「今ここにある危機」である。
- ・核兵器を持っていても
使われないだろうというのは幻想。
- ・核兵器をなくすことが
未来を守るための唯一の現実的な道だ。

出発前日の8月9日、平和祈念式典で語られた長崎市長による平和宣言をじっくりと聞いていると、平和の実現のために何が自分にできるのか、それを探す旅が広島派遣ではないのかと考え始めました。

1日目



いよいよ、広島に向けて出発です。

急遽の日程変更にも関わらず、全員が参加できました。

コロナの影響で、小学校から満足に宿泊学習ができなかった私たちにとっては、本当に大切な時間になるよう、それぞれがしっかり思いをもって出発しました。



まず、爆心地から約410mの距離で被爆した本川小学校の平和資料館を訪れました。

約400人の児童と10人の教職員が被爆し亡くなりました。

当時生き残ったのは、たった2人でした。

ガラスや瓶が溶けたもの、原爆投下後の様子の模型などが展示されていました。

元のかたちがわからなくなる熱線のすさまじさを感じました。



建物にも当時の被害の様子が刻まれていました。

原爆が投下された8時15分を指したまま止まっている婦人時計を見て、この空間は時が止まっているかのように感じました。

今も被爆当時をそのままのかたちで残す本川小学校は、78年前の出来事を必死に私たちに伝えようとしていることを感じました。

「助けを求める声がしきりに聞こえる。私も思い出しては、助けてーと叫ぶ。もう声も出ない。涙も出ない。だめだ、助からない。もうこのまま、死ぬのかな。助けにだれか来てくれないかな。はるか先にぼーっと明るいところが見える。あそこまで行きたいが、行けそうにない。死、死、死ぬんだ・・・」

当時の人の言葉には切実な思いや恐怖が記されていました。



被爆した校舎の歴史を記した年表に注目すると、学校の授業が1946年（昭和21年）2月23日に再開されていました。

原爆が投下されてから半年ほどで学校が再開されていたのです。

多くの被害を受けながらも、学びをあきらめないところに、当時の人々の「生きていこうとする心の強さ」を感じました。

被爆当時のものを初めて自分たちの目で見ただけで、原爆が投下されたという事実がより現実味を帯びました。心のどこかで、昔のこと、日本だけどころと遠くの話のように考えていた私たちにとって、「原爆は現実のことなんだ」と強く胸に刺さったことを覚えています。

また、同時に人々の強さを感じました。どこかで被害を受けた人たちは「かわいそう」と思っていました。とっては強く、前を向いて毎日を生きていました。

「私はどうだろう」、毎日何不自由なく生きている自分は、強く生きているのだろうか、そんなことを感じました。



湖北台中学校・木内 美希さん

平和記念公園



平和記念公園は、原爆犠牲者に対する冥福、弔い、平和への願いがこめられた公園です。たくさんの緑に囲まれた平和記念公園は公園といっても遊具はありません。しかし、この公園の雰囲気は、なぜかとても神秘的でせつなく、尊い印象を受けました。

78年前、自分が踏みしめるこの地で、多くの人々が犠牲になったことを思い浮かべながら、残された人々が平和について考えてきたことを想像しました。

たくさんの記念碑がありますが、朝鮮など、当時日本にいた外国の人々を供養する記念碑もありました。

原爆が投下されたのは日本ですが、決して日本の被害だけではなく、外国との関係にも目を向けないとならないことに気がつきました。

他にも様々な平和を願うための像や記念碑などがあります。

右の記念碑にはこんな言葉が刻まれていました。

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから。」

この言葉から、被爆者、戦争、平和といったすべてに対する思いや願いを感じることができました。



布佐中学校・浮谷 彪雅さん

平和記念資料館



平和記念公園の後は、平和記念資料館を見学しました。

原爆やその被害についてたくさんのことをより具体的に知ることができました。中には想像もしていなかった展示があり、目を背けたくなるものも多くありました。しかし、しっかり自分の目に焼き付け、原爆の被害について受け止めようと思いました。

資料館の展示を見学し始めるとすぐにプロジェクションマッピングを用いた、広島の変化を表した展示がありました。

投下される前の様子から、投下された後の変化を通して見ると、原爆のすさまじい威力がよくわかりました。

悲惨な様子が映し出されて、私は言葉を失ってしまいました。

しかし、これは当時の様子を再現しただけであり、焼け野原になった街を眺めることしかできなかった当時の人々は、どんな気持ちだったのかはわかりません。



これは当時の人々が身に付けていた衣服や持ち物です。

原爆の熱風によってボロボロになってしまっています。

このほかにも展示されていた遺品のすべてが原爆の威力、悲惨さを物語っていました。

この男の子は三輪車に乗っていた時に被爆しました。

そして、3年11ヶ月という、とても短い生涯を終えました。

原爆はいつもの日常と、多くの尊い命を一瞬にして奪いました。

そして、多くの人々の夢と希望も奪いました。



1日目の資料館の見学では、全てをしっかりと見る時間はありませんでした。

明日、もう一度見学できる機会には、それぞれの思いをもって、原爆の悲惨さと向き合いながら、資料を見ようと、資料館を後にしました。

反省会



1日目の最後に反省会を行いました。反省会では、我々派遣中学生一人一人がその日感じたことを伝え合いました。資料館で衝撃を受けたことや、広島で素直に感じとったことなど、仲間の考えていることを聞いていると、ふと、同じ時間を共有できる仲間がいること自体に幸せを感じていました。

原爆により一瞬で当たり前の日常を奪われた人々と、今ここにいる自分たちを比べると、何とも言い表せない感情になりました。

データや事実だけではない、気持ちを持ち帰ろう、教科書ではわからないこと、現地に来たからわかることを感じようなど、今の気持ちを全員で共有でき、それをもとに2日目に臨みました。

たった2日間しかない派遣の半分があっという間に終わりましたが、見るもの全てが私たちにとって衝撃の連続でした。

最終日に向け、「残された貴重な時間を大切にしよう」と、みんなで確認をし、1日目を終わりました。

2日目

原爆ドーム



2日目は、まず、原爆ドームを訪れました。

原爆ドームは元々、「広島県産業奨励館」という建物でしたが、原爆が投下され、一瞬で壊されてしまいました。

原爆ドームのほぼ真上から爆風が垂直にあたったため、奇跡的に建物の骨格が残ったそうです。

そして、現在では原爆の悲惨さを伝えるため当時のまま遺されています。また、世界遺産に登録され、人類が決してあの日を忘れてはならないという意味を含め、負の遺産となっています。

テレビニュースで画面越しに見るよりも、当時の原爆の威力の大きさを想像することができました。

たった3メートルの爆弾がこの大きな建物を一瞬にして破壊してしまうなんて、とても考えられませんでした。見れば見るほど、危うさ、はかなさを感じました。

見たことのない角度から、じっくり原爆ドームを眺めてみると、むき出しになった鉄骨や、今にも崩壊しそうな壁であることを感じました。

後世に残していくために、皆で守っていくべき、絶対忘れてはならないんだという広島の人々の思いがあってこそ、保存されてきたことを考えました。

原爆の子の像



広島では、原爆により、約2万2千人もの子供が亡くなっています。

平和記念公園内にある原爆の子の像は、子どもたちの尊い命を無駄にしないという願いが込められています。

全国からたくさんの千羽鶴が奉納されていて、千羽鶴の一羽それぞれに一人ひとりの

平和への強い思いが込められていると思うと、千羽鶴を奉納するということの責任の重さを感じました。また、たくさんの千羽鶴が奉納されているのを見て、恒久平和を多くの人々が願っていることが感じられました。

私たちが我孫子のみなさんのたくさんの願いが込められた千羽鶴を奉納させていただきました。「子どもたちの誰もが、小さな願いでいいから叶う世界になってほしい」と、思いを込めました。

原爆の子の像のモデルになった佐々木禎子さんは、折り鶴を折り続けたことで知られている方です。

1943年昭和18年に広島に生まれ、当時2歳、爆心地から1.6kmの自宅で被爆し、10年後の12歳の時、突然白血病を発症しました。

禎子さんは闘病中、「生きたい」と願いながら、薬やキャラメルのお包み紙で千羽鶴を折り続けましたが、願いかなわず、1955年、昭和30年10月25日の朝、わずか12歳という若さでその命を閉じました。

「禎子さんを始め、原爆で亡くなった方の霊を慰める石碑を創ろう」と禎子さんの同級生に提案があり、原爆の子の像が1985年（昭和60年）5月5日に建てられました。禎子さんの同級生の方々は被爆という壮絶な体験をし、さらに大切な友達を失ってしまいました。しかし、「原爆でなくなったすべての子どものために」という思いで、慰霊碑をつくる活動に中学時代を費やし、原爆の子の像がつくられました。さまざまな困難を乗り越え、本当に強い、と思いました。



白山中学校・楠 梨衣子さん

石碑の上には女の子が両手を広げ、平和の象徴である鶴を掲げています。

像の下の石碑には「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和を築くための」と刻まれています。この像には「明るい希望」という意味がこめられています。



原爆死没者追悼平和祈念館



広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れました。

壁面には1945年末までの死没者数14万人と同じ数のタイルを使っています。

構造は地下一階から時計の針と逆回りにスロープを下ることにより、被爆直後の広島へと時間を遡ります。

構造、一つ一つに工夫がされており、被爆者への思いが込められていることを心から感じました。

被爆体験講話



被爆当時、三才だった清水弘士さんから被爆体験のお話を伺いました。清水さんのお話で印象に残っていることは特に3つあります。

一つ目は、原爆後遺症についてです。私は派遣に行くまで、原爆の被害は過去の話であると勝手に思い込んでいました。しかし、現実は違いました。清水さんのお話を聞くにつれ、原爆後遺症が多くの被爆者の方々を今もなお、苦しめていることを知りました。「戦争は死ぬまで終わらない」清水さんがおっしゃっていたこの言葉の意味がハッキリと分かりました。

二つ目は、空白の十年についてです。GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が発令した、広島・長崎に関する報道を禁止するという「プレス・コード」により十年間、被害の実態が正確に伝えられませんでした。

このことにより、医療や生活の支援を十分に受けられず、被爆者の人々は様々な差別や偏見にも苦しみました。生き残っても、様々な壁にぶつかっていたことが分かり、そんななかでも必死に生き抜いてこられた人々の精神の強さを感じました。

三つ目は今現在世界中に存在する核弾頭の数についてです。ロシアだけでも5,889所有しており、主要な国だけでも合わせて約12,000もの核弾頭が確認されているそうです。一時期に比べれば、その数は減っているものの、もし今戦争をしている国々が核を使い始めたら地球が放射線で汚染されてしまい、人類は住めなくなってしまう。その話を聞いて私は、核兵器の恐ろしさを感じました。

講話の後、質問の時間が設けられました。核をなくすためにどうすればよいか？という私たちからの質問に対して、清水さんは「核を持っている国の国民が自分の国の核保有について声を上げるべき」という答えでした。

講話の後、質問の時間が設けられました。

核をなくすためにどうすればよいか？という私たちからの質問に対して、清水さんは「核を持っている国の国民が自分の国の核保有について声を上げるべき」という答えでした。



湖北台中学校・茅野 葵さん



清水さんの講話を伺い、平和の実現に向けて、より思いが強くなりました。

また、原爆は昔の話でもなく、自分に無関係のことでもないんだと感じました。

しかし、被爆を体験されている方からお話を伺えるのも、あとどのぐらいの時間でしょうか。

戦後78年が経過した今、自分自身の体験から伝えられる人は少なくなっています。

広島派遣中学生として、清水さんの話を次の世代に伝えていく責任・使命を重く感じました。



久寺家中学校・石川 心愛さん



1日目も訪れた平和記念資料館をもう一度見学しました。

自分がしっかり見たいもの、考えたいことを決めて、じっくり見学することができました。

これは原爆の熱風で、服が焼け、被爆者の人々が裸で逃げる家族を描いています。

服は全て焼けてなくなったのでしょうか。

必死に子どもの手を引く姿、周囲には倒れている人々。

まさに広島は地獄のようだったのかと、そして人々が原爆投下された時を絵でなぜ残しているのか考えました。



たった2日間とは思えない、内容が充実した広島派遣でした。

この2日間で原爆についての知識だけでなく、戦争の恐ろしさや残酷さ、また被爆者の生きる強さ、後世に伝えようとする意志など、現地でしかわからないことをたくさん得ることができました。

これらの派遣を通して、行く前よりも一回り成長した気がしました。

我孫子市平和祈念式典

私達は広島派遣の翌日、8月12日にアビスタで行われた我孫子市平和記念式典に参加しました。

多くの方が参列していることに驚きました。

現在の世界情勢に目を向ければ、ロシア・ウクライナ・イスラエルやパレスチナなど、戦争のニュースは絶えません。





平和への関心は高まっているということは、世界は平和ではないからだと感じました。

我孫子市平和祈念式典は、戦没者及び原爆犠牲者に哀悼の意をささげるとともに、核兵器の廃絶と平和を祈念し、毎年実施しています。

我孫子市の平和都市宣言を読み上げ、今一度平和の実現に向けた気持ちを参列者で一つにしました。

また、原爆犠牲者を含む多くの戦没者の方々に対し献花を行いました。

平和都市宣言では、世界の恒久平和についての願いや、我孫子市の核兵器廃絶に対しての思いがつつられていました。



平和都市宣言を読み終え、献花が行われた後には、私たちの学校の生徒のみんなで作り上げた千羽鶴を奉納しました。



学校ではたくさんの仲間に協力してもらいました。

でも、鶴を折ることの意味をあまりしっかり伝えられなかった気がします。

なぜみんなと一緒にやるのか、もう一度学校でみんなに平和について考えてもらい、思いを伝えたいです。

我孫子中学校・木村 碧良さん



私たちは、それぞれの平和への思いを込め、灯籠の作成を行いました。

平和市民会議の方や、派遣OBの方など、多くの方が我孫子市の平和の事業に携わっており、

特にOBの先輩方からは、過去の派遣などの話も聞かせていただきました。

あんな先輩になりたいと、しっかり思いをもち、今でも継続して活動に取り組む姿に憧れました。

当日作成した灯籠はアビスタのロビーに、多くの方から寄せられた千羽鶴とともに飾られ、平和の願いを発信しました。

中には、ロシアとウクライナの戦争終結を願い、国旗のカラーで作成されたものもありました。

私たちが一人ずつ、平和への願いを灯籠に込めました。



布佐中学校・市川 未来さん



我孫子中学校 木村 碧良 さん
「つらい思いをする人が
いなくなりますように」

我孫子中学校 百海 恭吾 さん
「平和な世界へ」





湖北中学校 太田屋 颯葉 さん
「核兵器が廃絶されますように」

湖北中学校 深山 愛依梨 さん
「平和祈願」



布佐中学校 市川 未来 さん
「原爆の怖さを
より多くの人に知ってほしい」

布佐中学校 浮谷 彪雅 さん
「広げよう 平和の輪」



湖北台中学校 茅野 葵 さん
「平和共存」

湖北台中学校 木内 美希 さん
「ずっと笑顔で
暮らせますように」





久寺家中学校 石川 心愛 さん
「未来」
「戦争の恐ろしさを、
次の世代へ」

久寺家中学校 坂本 大翼 さん
「核のない 戦争のない
平和な日々を世界に」



白山中学校 楠 梨衣子 さん
「安らかに眠ってください
過ちは繰り返させぬから」

白山中学校 小菅 新太 さん
「世界から争いを
世界に平和を」



広島・長崎派遣中学生リレー講座「未来を生きる子どもたちへ」

我孫子市では、元派遣中学生たちで、小学校6年生に平和について考える授業をしています。

それがリレー講座です。自分たちの経験を、次につなぐことを目的として、リレー講座と名付けられました。

我々の代はコロナウイルスの影響で、ほとんどの人がリレー講座を受けたことがありませんでした。



どうすればよいのか不安もありましたが、先輩方に助けられながら、初めて授業をする立場で、リレー講座に参加しました。

リレー講座にかかわってみて、広島や長崎でなにがあったのかを教えるだけでなく、そのことから戦争や原爆というのはどれほど残酷であり、それをなぜ繰り返してはならないか、そしていま私たちが暮らしている中での平和とは何か、それがどれほど幸せなことなのかということグループワークなどで小学生たちと話し合いました。

児童たちがあげてくれた意見には、「今を大切にしよう」、「命や明日はどれだけのお金があっても買えない」、「日々が当たり前じゃないことが、今日の授業を通して分かった」などあり、少し自分たちの役割が果たせたことにうれしさを感じました。



さらにリレー講座に参加して、わたしたちが中心になり、小学生が平和を深く考える授業を行いたいです。



湖北中学校・太田屋 颯葉さん